平成２０年度「発達障害早期総合支援モデル事業」報告書（中間・最終）

都道府県名	群馬県
地域名	昭和村
研究期間	平成２０～２１年度

Ⅰ　概要

１　研究課題

小さい自治体のよさを生かし、保健師と村内の保育園及び小学校の特別支援教育コーディネーター（以下「コーディネーター」という。）が連携し、乳幼児健診からの一貫した総合支援体制を構築する。加えて、臨床発達心理士や臨床心理士等の専門家を含む巡回相談により、保育園における特別な支援を必要とする子どもの早期発見と具体的な支援のあり方について研究する。

２　研究の概要

(1)保健師と小学校のコーディネーター等が連携し、乳幼児検診のフォローアップから就学までの特別な支援が必要と思われる子どもとその保護者への一貫した支援システムを構築する。

(2)保健師、小学校のコーディネーター及び専門家がチームを組み保育園を定期的に巡回し、ケース検討会議等を通して、支援の必要な子どもの早期発見と、保育園における具体的な支援のあり方について検討する。

(3)講演会の実施やリーフレット等の配布を通じ、特別支援教育や発達障害等についての効果的な啓発活動のあり方を検討する。

３　研究成果の概要

(1)「昭和村早期総合支援モデル地域協議会」の開催

これまで本村で幼児期の療育等にかかわってきた関係者に加え、近隣の総合病院の医師や保健福祉事務所等の担当者が一堂に会することができ、利根・沼田の広域圏の関係者との連携が深まった。また、広範な見地から本村の早期支援について意見交換ができた。

(2)「家庭での子育て支援」に関する事業

小学校のコーディネーターの参加により移行支援にも効果があった。また、ここでの子どもの様子や具体的な支援策が家庭での療育にプラスになったという意見もあった。

(3)「保育園での療育支援・移行支援」に関する事業

巡回を通して、特別な支援が必要だと思われる個々のケースについて具体的に必要な支援等について考えてきた。このことは子どもへの効果的な支援につながっただけでなく、関係した保育士やコーディネーターの専門性の向上も図られた。

(4)啓発活動

保育士向け講演会は、本村を中心に広域圏の関係者にとって貴重な研修となった。保護者向けの講演会にはほとんどの家庭が父親を中心に出席しており、発達障害や早期支援の

必要性等について、多くの保護者の理解を深めることができたと考える。

Ⅱ　詳細の報告

１ モデル地域の名称

NO	モデル地域名
1	昭和村

２ モデル地域内の幼稚園・保育所・学校数及び幼児児童数

(1) 幼稚園・保育所

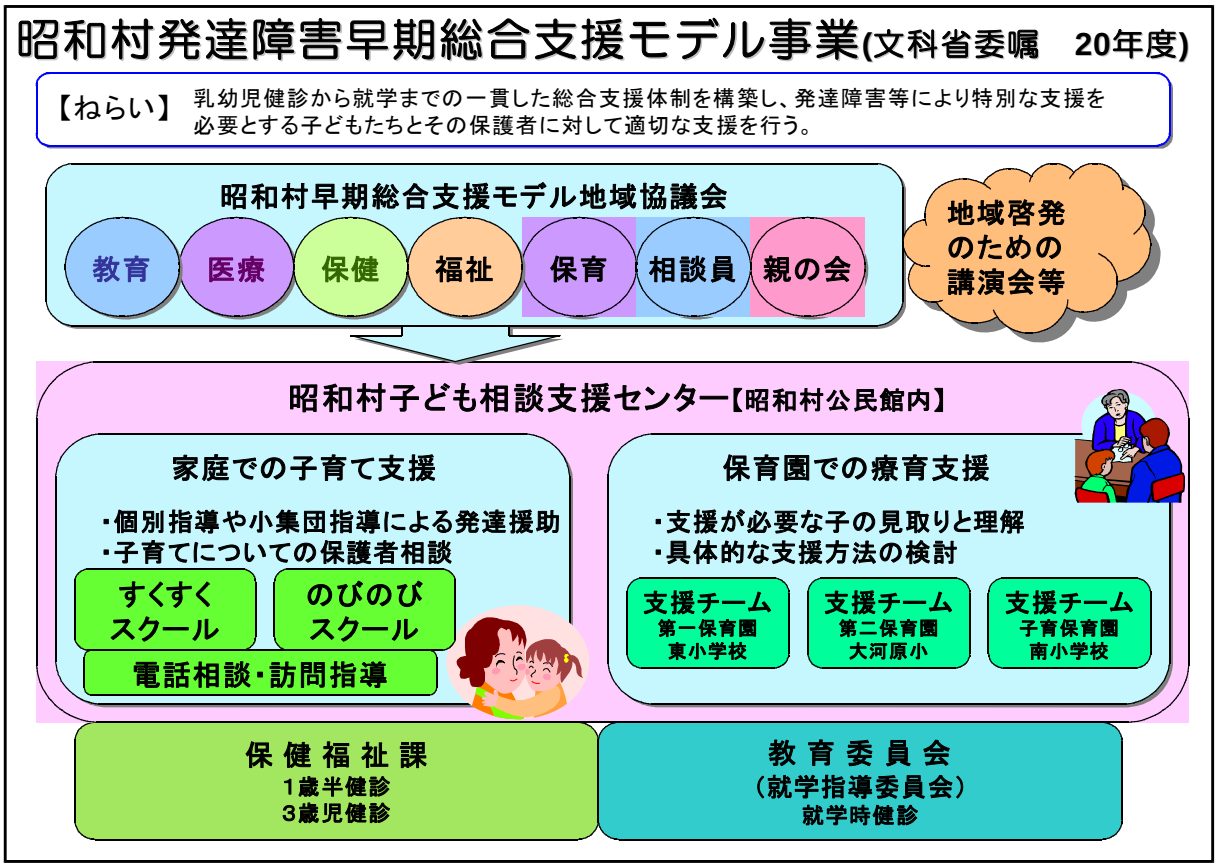
地域内の幼稚園・保育所	幼稚園		保育所		合計	
	園数	幼児数	か所数	幼児数	園・か所数	幼児数
昭和村	０	０	３	２９３	３	２９３

(2) 小学校

地域内の小学校	小学校	
	学校数	児童数
昭和村	３	４４４

(3) 特別支援学校　　なし

３　事業全体の概念図



４　事業の内容

(1) 早期総合支援モデル地域協議会

ア　構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	昭和村教育長	会長
2	昭和村立南小学校　校長	副会長
3	昭和村保健福祉課　課長補佐	副会長
4	学校医	小児科医
5	国立病院機構沼田病院　小児科医長	小児科医
6	利根中央病院　医師	精神科医
7	高崎健康福祉大学　准教授	臨床発達心理士
8	専門相談員	臨床発達心理士
9	昭和村立東小学校　校長	
１０	昭和村立大河原小学校　校長	
１１	昭和村立東小学校　特別支援教育コーディネーター	
１２	昭和村立南小学校　特別支援教育コーディネーター	臨床発達心理士
１３	昭和村立大河原小学校　特別支援教育コーディネーター	
１４	第一保育園　園長	

１５	第二保育園　園長	
１６	子育保育園　園長	
１７	昭和村手をつなぐ親の会　会長	
１８	昭和村保健福祉課　保健師	
１９	昭和村保健福祉課　保健師	
２０	沼田保健福祉事務所　療育担当	
２１	榛名養護学校沼田分校　地域支援担当	
２２	沼田市心身障害児通園施設　指導員	
２３	昭和村障害者相談支援事業所　相談員	
２４	昭和村教育委員会　次長	
２５	昭和村教育委員会　学校教育係長	
２６	昭和村教育委員会　嘱託	

イ 開催回数・検討内容

（ア）開催回数　３回

（イ）検討内容

第１回地域協議会（平成２０年５月２７日）

・平成２０年度発達障害早期総合支援モデル事業概要説明

・昭和村早期総合支援モデル地域協議会について

・昭和村子ども相談支援センターの運営について

第２回地域協議会（平成２０年１２月４日）

・事業の経過状況報告

・「昭和村子ども相談支援センター設置要綱」について

・アンケートの実施について

第３回地域協議会（平成２１年２月２６日）

・アンケート結果の分析

・保育園の「支援計画」のあり方

・次年度の事業計画について

（ウ）早期総合支援モデル地域協議会における取組の成果と課題

これまで本村で幼児期・学童期の療育や支援にかかわってきた関係者に加え、近隣の総合病院の医師（小児科・精神科）や特別支援学校、保健福祉事務所等の担当者が一堂に会することができた。本村を取り巻く広域圏の関係者との連携の可能性が広がってきている。具体的には、特別支援学校に進学する子どもについて保育園での様子を観察してもらうことができた。

また、協議会の開催により、広範な見地から本村の早期支援について意見交換ができた。その意見交換から今後、新たな具体的活動の方針も見いだすことができた。来年度は、医師による保育園の巡回等について検討し、実施していきたい。

(2)相談・指導教室

ア 構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	昭和村保健福祉課　保健師	
2	専門相談員	臨床発達心理士
3	専門相談員	理学療法士
4	昭和村立東小学校　特別支援教育コーディネーター	
5	昭和村立南小学校　特別支援教育コーディネーター	臨床発達心理士
6	昭和村立大河原小学校　特別支援教育コーディネーター	
7	昭和村障害者相談支援事業所　相談員	
8	昭和村教育委員会　学校教育係長	
9	昭和村教育委員会　嘱託	

イ 相談・指導教室の概要（箇所数・実施回数・対象者等）

名　称	実　施　日	対　象　者
すくすくスクール	４月１６日・５月２１日・６月１８日 ７月１６日・８月１９日・９月１７日 10月１５日・11月１９日・12月１７日 １月２１日・２月１８日・３月１８日	乳幼児検診でフォローアップが必要だと思われる子どもとその保護者。 （およそ３歳程度まで）
のびのびスクール	５月２８日・６月２５日・７月２３日 ８月２７日・９月２４日・10月２２日 11月２６日・12月１０日・１月２８日 ２月２５日・３月１８日	乳幼児検診でフォローアップが必要だと思われる子どもとその保護者。 保育園から相談があった子どもとその保護者。 （およそ３歳から就学まで）
体の相談会	12月２１日・１月２４日・２月２２日 ３月１４日	運動発達や動きの巧緻性に課題が感じられる幼児。

ウ 主な実施内容

(ア)すくすくスクール

発達を促すような遊具を用意しながらの自由遊びを基本とし、保護者からの相談に応じてきた。相談内容としては、子どもの発達状態に関することや行動の意味について疑問等が出された。また、入園を考えている保護者には村内の保育園の現状等についても情報提供した。入園している子どもでは、保育園の保育士が参加し、相談に加わることもあった。

（イ）のびのびスクール

保護者を含めた小集団での指導を中心に実施してきた。小集団指導の前後等に、特に年長児の保護者とは学校・学級選択についての相談に応じた。就学予定の学校

の具体的な様子を小学校のコーディネーターが直接話したり、入学に向けて必要と思われることについて、個々のケースに応じて支援してきた。

（ウ）体の相談会

理学療法士による身体発達や運動発達に関する相談を行ってきた。走っているときにバランスが悪く転びやすい子等を対象に、身体発達の様子等について説明をしたり、父親等に具体的な支援の方法についてアドバイスしたりしてきた。

エ 成果と課題

〇参加した保護者からは概ねよい評価を受けた。特に、ここでの子どもの様子や具体的なかかわり方が家庭での保護者の子ども理解にプラスになったという意見も多かった。より個別的な相談等への希望もあり、今後運営については検討を重ね、家庭でのよりよい支援につながるよう改善をしていきたい。

〇小学校のコーディネーターが参加することについては、参加者、コーディネーターともに効果的であると評価している。特に年長児の保護者については、就学予定先の学校の様子がわかるだけでなく、子どもをコーディネーターに見てもらえたことで、安心感につながった。また、小学校のコーディネーターとしても、入学前に個別に観察をすことができ、子ども理解が深まった。小学校のコーディネーターがこの事業に参加するには、特に所属校の理解が必要であり、管理職を始めとする職員への啓発等に努める必要がある。

(3)教育相談会・講演会

ア 教育相談会・講演会の概要

(ア)保育士等向け講演会の開催

回	日　時	会　　場	講　師　及　び　演　題	参加者
1	7月12日（土） 午後2時～ 4時30分	昭和村公民館 多目的ホール	新潟大学教育学部 准教授　長澤　正樹先生 演題：発達障害のある子どもの理解と支援	９５名
2	11月29日（土） 午後2時～ 4時30分	昭和村公民館 大会議室	東北大学　大学院教育学研究科 教授　本郷　一夫先生 演題：『気になる』子どもの理解と対応	６５名
3	2月7日（土） 午後2時～ 4時30分	昭和村公民館 多目的ホール	白百合女子大学　児童文化学科 教授　秦野　悦子先生 演題：保育を通しての家族支援を考える	７３名

(イ)保護者向け講演会の開催

園	日　時	講　師　及　び　演　題	参加者
第一保育園	1月17日（土） 午前10時～11時	臨床心理士　星野　亜希子　先生 演題：心を育てよう	９０名
第二保育園	1月17日（土） 午前9時30分～	高崎健康福祉大学短期大学部児童福祉学科 准教授　宮内　洋先生	５３名

	10時15分	演題：がんじがらめの子どもたち	
子育保育園	6月18日（土） 午前10時30分～ 12時	群馬県幼児教育センター 保育アドバイザー　佐野　信子先生 演題：子どもの育ち“今を大切に” 一人一人が大切な存在の子どもたち	６５名

イ 成果と課題

〇保育士向け講演会には保育士だけでなく、小中学校・特別支援学校の職員、学童保育所指導員、保健師等保健福祉関係職員等、多方面からの参加者があった。本村を中心に広域圏の関係者にとって貴重な研修となっただけでなく、広域圏での連携が図られることにもつながってきている。今後も参加者の希望等を参考にしながら企画していきたい。

〇保護者向けの講演会は、保育参観日に実施したため父親を始めほとんどの家庭が出席していた。その意味では、すべての保護者の発達障害や早期支援の必要性等についての理解を深めることができたと考える。また、保育園同士で職員のやりくりをし、数名が他の園の講演会にも参加するなど、積極的に研修しようとする姿勢がみられた。今年度の各園での講演内容を踏まえ、その連続性や関連性を考慮しながら次年度以降の講演会の企画に生かしていきたい。

(4)早期発見・早期支援

ア 早期発見

(ｱ)モデル地域内での具体的な取組

本村は、１歳半・３歳等の乳幼児健診の受診率は100%に近く、ほとんどの乳幼児をそこでスクリーニングすることが可能である。また、就学前の幼児の九割以上が村内の保育園を利用している。そのため、臨床心理士、臨床発達心理士が乳幼児健診や保育園の巡回に参加することで、村内のほとんどの子どもについてその発達の様子を専門的に検討することが可能であった。今年度は、巡回の回数を増やすとともに、保育士とのカンファレンスの時間も確保し保育士の専門性の向上に努め、日々接している保育士の目を通しての早期発見に努めてきた。

(ｲ)本年の成果

保育士へのアンケート結果からは、巡回やカンファレンスを通して、保育士が「気になる子ども」「支援の必要な子ども」により目を向けるようになったことがうかがえる。具体的に発達障害等が疑われる子どもに対する気付きも増え、そのことが次の巡回相談につながっていると考えられる。このような循環の中で、日々の保育場面そのものが「気になる子ども」等の早期発見のために機能していたといえる。

また、小学校のコーディネーターが参加することで臨床心理士、臨床発達心理士とは異なる観点から子どもを観る機会もでき、このことも早期発見に寄与している。

(ｳ)課題と今後の方針

保育園は勤務時間中には常に子どもの保育をしなければならず、制度的に全職員がカンファレンスに参加することは非常に難しい。そのため、カンファレンスを職員の研修と位置付け、交代で参加するような園内体制を構築する必要がある。園では巡回相談を効果的であると認識しており、今後はより多くの職員が参加できるような工夫が望まれる。

また、小学校のコーディネーターの参加についても、その効果を認める意見が保育園側・小学校側の双方で高かった。小学校のコーディネーターにとっても貴重な研修の場になっていた。今後もより充実した巡回相談を実施する上でも、所属校の理解が必要であり、管理職を始めとする職員への啓発等に努める必要がある。

イ 早期支援

（ァ）モデル地域内での具体的な取組

保健師のこまめな連絡により、「すくすくスクール」「のびのびスクール」には数組の家族が定期的に参加している。その中で、相談員等が子どもの様子を継続的に観察し、家庭の状況に対しても理解を深めることができた。そのような中で、家庭での具体的な支援策等が相談員等から示されるようになった。

保育園での巡回相談では個々のケースについての話し合いが中心であり、その中で具体的な支援策について巡回相談員や小学校のコーディネーターから提案がなされた。保育士はそれらをもとに、各園の実態に応じて取り入れることが可能な支援を実践してきている。

（イ）本年の成果

「すくすくスクール」「のびのびスクール」の参加者のアンケートからは、「子どもの良いところをよく見るようになった。」「子どもの行動の意味を考えるようになった。」等の意見が多かった。その結果「子育ての不安が少なくなった。」という意見も多く、家庭での早期支援に一定の成果があった。

保育園へのアンケートによれば、カンファレンスで取り上げたケースを担当している保育士のほとんどが何らかの具体的な支援を取り入れている。そのすべてが有効だったとは評価していないが、子どもが大きく変わったような支援も多かった。個々のケースを中心にしたことは子どもへの効果的な支援につながっただけでなく、関係した保育士や小学校のコーディネーターの専門性の向上も図られた。

また、保育士の発達障害についてのイメージでは、単に「集団への参加が苦手」「コミュニケーションが取りにくい」といった行動面での理解だけでなく、「発達の偏り」「困った感を感じているのは子ども自身」といった本質的な理解をする保育士もみられた。これらの発達障害についての理解の深まりも、間接的ではあるが有効な支援につながっている。

（ゥ）課題と今後の方針

「すくすくスクール」「のびのびスクール」への参加を通じ、保護者の家庭での子ど

も理解は深まってきているといえる。しかし、そのことが家庭での子どもとの時間を楽しいと感じたり、接し方がよくなったといった具体的な早期療育の姿につながっていなかった。今後は、より個別的な相談の場も確保するなど、運営面での見直しが必要である。

保育園へのアンケートからは、「取り入れたいと思ったができなかった」という支援も多かったことがうかがえる。時間的・人的な制約がその大きな理由になっていた。人的な支援の方策を探ると同時に、カンファレンスの持ち方を検討し、その園で取り入れることが可能なより実践的な支援を構築できるようにしていくことも重要であると考える。一つのケースについて継続的に取り上げることで、その間の支援を検討し、より望ましく実行可能な支援を検討できるようにしていきたい。

⑸学校等への円滑な移行方法の工夫（就学相談等を含む）

ア モデル地域内での具体的な取組

（ア）巡回相談を通しての移行支援

これまで述べてきた巡回相談には、小学校のコーディネーターも参加してきた。そのことで書面等からの情報だけでなく、コーディネーター自身が子どもたちの様子を観察し、その特徴等を理解する機会としてきた。このような「生きた資料」は、入学後に担任に引き継ぐことで、その子ども理解に大きく役立つと考えられる。

（イ）「フォローアップ会議」を通しての移行支援

入学後間もない５月から６月にかけ、新入生の様子について、現一年担任と保育園の元担任等が情報交換をする会を「フォローアップ会議」という名称で企画してきた。入学後の子どもたちの姿を授業参観等で共有し、移行に際して認められた子どもの変容等について確認をした。また、それぞれの園や学校の療育・教育についての情報交換も行った。

（ウ）「のびのびスクール」を通しての移行支援

保護者と就学予定の小学校のコーディネーターとが、子どもの様子を共有しながら、就学について具体的な相談活動をしてきた。その時間内の相談だけでなく、小学校や近隣の特別支援学校の様子を参観する機会も設けた。

イ 本年の成果

巡回や「のびのびスクール」への参加を通して小学校のコーディネーターという「人」が情報を直接に集め、引き継ぐことができるようになった。保育園や保護者が気になっている子どもを、受け入れる小学校の立場から観察し、入学後の具体的な支援を考えることができた。そのことは、受け入れる小学校にとって重要な資料になるだけでなく、就学する子どもやその保護者の安心感につながっている。特に第１子で小学校の様子がよく分からない保護者にとっては、小学校のコーディネーターとの相談は貴重な機会になった。

また、「フォローアップ会議」ではお互いの機関の違いが認識された。保育園と小学校の様々な「違い」が制度的なものだけでなく、具体的な生活場面や子どもの見せる姿としても理解された。そのことが保育園でのその後の指導に生かされたり、小学校での児童理解の深まりに効果があった。また、顔見知りになれたことで、その後の連絡等もスムースになった。このことは間接的な移行支援として効果があるといえる。これらの多面的・重層的な取り組みが効果的な移行支援を実現していると考える。

ウ 課題と今後の方針

村内の保育園から村内の小学校への移行支援は効果的なものになってきている。しかし、若干ではあるが村外の園・所から入学してくる子どもや村外の小学校に就学する子どももいる。それらの機関との連携も課題となっている。これについては他市町村教育委員会と連携を密にしながら取り組んでいきたい。

また、小学校入学と同時に学童保育所を利用する子どもも多い。学童保育所の指導員のほとんどは発達障害等についての専門的知識がなく、対応に苦慮している実態がある。本村の学童保育所は保健福祉課の管轄であるが、すべてが小学校の敷地内に開設されている。そのため、小学校との連携や専門家による巡回等による支援に取り組んでいく予定である。

⑹ 関連事業等との連携

特になし。

⑺ その他特記事項（エピソード等を含む）

ア　早期発見から就学支援につながったＡくんのケース

Ａくんは年少から保育園に入った。入園当初から落ち着きに欠けていたが、特に行事ではパニック様の状態になることが多かった。ただ、ひらがなをスラスラと読んだり大人を唸らせるような豊富な語彙があるなど、知的な発達には遅れが感じられなかった。保育士が「アスペルガー症候群ではないか」と気づき、相談が開始された。

年長の夏休みに入学予定の小学校のコーディネーターが心理検査（Ｋ－ＡＢＣ）を実施し、その結果を踏まえて園・保護者・小学校のコーディネーターでカンファレンスを実施した。そこで、Ａくんの行動の意味を共通理解し、園や家庭でできる支援について話し合った。また、コーディネーターから入学予定の小学校の特別支援教育の状況についても具体的な情報提供をした。このカンファレンスを通じ、保護者は漠然ともっていた子どもの発達に対する不安を直視し、小学校への入学を見据えて、家でのかかわりを見直すようになった。このことがＡくんの大きな変化につながったと保育士は評価している。さらに、秋に再度心理検査（ＷＩＳＣ－Ⅲ）を実施し、前回と同様にカンファレンスをもった。ここでは、Ａくんの知的な発達の様子を確認した上で、小学校での具体的な支援の在り方について話し合った。

その間、Ａくんは就学時健診等で何度か学校にくることがあった。その都度コーディネーターがかかわりをもった。そのことで健診やその他の活動にも比較的落ち着いて参加することができた。そのような関係を保護者も好ましいこと、ありがたいことと受け止めていた。

就学後は通常の学級で学習するＡくんの様子を観察しながら、コーディネーターが個別的な対応をする予定である。保護者は入学後も定期的なカンファレンスを望んでいる。今後も家庭と協力しながらＡくんの支援に当たっていくことで、Ａくんの充実した学校生活を実現できると考えている。

イ　啓発用リーフレットの作成

本事業について周知するため、別添のリーフレットを作成し、保育園の保護者や各学校等に配布した。